



# 放課後美術レッスン

ヌードモデルは美姉と部長

芳川葵

挿絵／猫丸

立ち読み版



Contents

目次

第一章	【発端】放課後のヌードモデル……………	4
第二章	【誘惑】美術部長のご褒美レッスン……………	53
第三章	【禁断】美姉の覚悟と捧げられた純潔……………	111
第四章	【背徳】スリルと興奮の放課後……………	162
第五章	【狂艶】プチ合宿の夜 僕を惑わす2つの媚肉……………	219

## 登場人物

Characters

### 藤村 翔吾

(ふじむら しょうご)

美術部に所属する内気な性格の少年。美しい姉に密かに憧れている。

### 藤村 佳織

(ふじむら かおり)

翔吾の姉。生徒会長と女子テニス部主将を務めるしっかり者。清楚で整った顔立ちとFカップの豊乳の持ち主。

### 立崎 七瀬

(たちざき ななせ)

生徒会副会長。サバサバとした性格の姐御肌。翔吾の所属する美術部の部長でもあり、よく翔吾をからかう。

（やっぱり、全然集中できないよ。女性の裸を見るのが初めてなのに、相手が昔から知っている七瀬さんじゃ余計意識しちゃうよな。それにお姉ちゃんのオッパイに関する情報までもらっちゃったら……。Fカップつて、どれくらいの大きさなんだろう？）

首から下のボディシルエットを大雑把に描き、美しいお椀形の膨らみの輪郭を描き出しつつ、翔吾の脳裏には、まだ見ぬ美姉のたわわな乳房が浮かんできていた。

（ダメだ、駄目だ。お姉ちゃんの裸なんて、僕が見られるわけないんだ。せつかく七瀬さんが僕のために裸になってくれてるんだから、そっちに集中しなくちゃ！）

小さく首を振り、妄想の中のFカップを振り払い、改めて七瀬の裸体に視線を向けていった。Dカップの小山から視線を下に向けていく。余分な肉のついていない括れたウエスト。視線はすぐにその下、ふんわりと盛りあがるデルタ形のヘアに釘づけとなってしまう。

（僕のあそこの毛と違って、すっごく柔らかそうだよな。お姉ちゃんのも、あんなふうに……。あっ！ いけない、また、お姉ちゃんのことを……）

「ねえ、翔吾くん。佳織に告白してみる気はないの？ 付き合ってくださいって」

「へっ？ なっ、なに言ってるんですか!! そんなこと、できるわけないでしょう」

集中力の途切れを突くように、七瀬が思わぬ言葉を投げかけてきた。突然のことに

思わず本音の言葉が口をついてしまう。

「ふふふっ、やっぱり好きなんじゃない。弟としてじゃなく、一人の男の子として。でもさ、手を打つなら早いほうがいいよ。いまはまだ彼氏作ってないけど、佳織がその気になったら、簡単にできちゃうだろうし」

「お姉ちゃんが幸せになつてくれるなら、僕はそれで充分ですよ」

本音を口にしてしまった以上、隠し立てしてもはじまらない。翔吾は素直に心情を吐露していった。

（そうだよ。どんなに好きでも、姉弟じゃどうしようもないじゃないか）

なんで自分は佳織の弟として生まれてきてしまったのだろう。そんなことを考えたのは、一度や二度ではない。だが一方で、弟だからこそ姉は自分を可愛がってくれているのだ、という思いも新たにさせられもするのだ。

「ふーん、翔吾くんがそれでいいなら、あたしがとやかく言うことじゃないけどね。おっと、いつの間にか十分経ってるわ、終了」

「えっ、あっ、はい」

腰に当てていた右手を離し、七瀬が椅子に座る翔吾に近寄ってきた。お椀形の膨らみがぷるんつと弾むように揺れ、痛いほどにいきり立つ強張りが大きく胴震いを起こ

してしまった。

「どれどれ……。ちよつと翔吾くん、あんなにジロジロ見ていたくせに、これだけ？」

「ごめんなさい、なんか、あの、集中、できなくなつて」

真横に來た美術部長の言葉に、翔吾は申し訳なさそうに頭を下げた。チラッと横を見れば、触つてもいいのよ、と言わんばかりの近さに若乳があり、全身が燃えるように熱くなつてしまう。さらに視線を少しさげるだけで、黒々とした陰毛が飛びこんでくる。いかにも柔らかそうな細毛の密集に、背筋がゾクッと震えてしまった。

「裸を見るの、本当に初めてだったみたいね」

「はい」

「それじゃあ仕方ないわね。さあ、交替よ。今度は翔吾くんが裸になつてちようだい」  
開いたままのスケッチブックに視線を戻し、恥ずかしそうに小さく頷くと、姉友はクスッと微笑み、翔吾の腕を取ると、強引に椅子から立ちあがらせようとしてきた。立ちあがった翔吾は、手にしたままのスケッチブックで股間を隠していく。

「あつ、あの、やつぱり裸にならなきゃ、ダメ、ですか？」

「当たり前。さつきも言つたけど、あたしはそのためにここに來てるんだからね。それに、協力できることはするつて言つたの、キミだったはずだぞ」

「そ、そう、ですよね」

引き攣った笑みでそう言うのと、翔吾は諦めたようにベッド前へと移動していった。七瀬に背中を見せる形で、スケッチブックをベッドの上に置き、制服を脱ぎはじめた。カッターシャツと中に着ていたインナーシャツを脱ぎ、黒の学生ズボンも脱ぎおろしていく。グレーのボクサーブリーフの前面が、こんもりと盛りあがっている。さらには先走りによるシミが、黒っぽく浮かびあがっていた。

（どうしよう、パンツも脱がなきゃいけないのは分かっているけど、でも、チンチン硬くしているのを見られるのはさすがに……）

「あの、パンツは脱がなくてもいいとか、そういうことは」

「ない！ あたしだって全部見せてあげたんだから、男らしく脱ぎなさい。それに、さっさとしないと佳織に言いつけるわよ」

顔だけ後ろにねじ曲げ、いまは勉強椅子に座っている七瀬に恐々と声をかけた翔吾に、姉友は唇の端をあげ、意地悪く返してきた。

「な、なにを……。一体、七瀬さんは、お姉ちゃんになにを言うつもりなんですか？」

「簡単なことよ。あなたが可愛がっている弟は、姉に対して邪な欲望よこしまを募らせているから、気をつけたほうがいいわよ、って教えてあげるのよ」

「ぬ、脱ぎます！　すぐに脱ぎますから、お姉ちゃんにはなにも言わないで」

背筋に悪寒が走った。翔吾がこの世で最も恐ろしいのは、大好きな美姉に嫌われることであつた。勃起を晒すのは確かに恥ずかしい。しかし、佳織に嫌われることに比べればたいしたことはないように思える。

翔吾はすぐにボクサーブリーフの縁に指を引っかけると、一気に足首までおろしていった。ぶんと唸るようにペニスが飛び出し、ペチンツと下腹部を叩いてきた。同時に、下着に押さえこまれていた牡臭が漂い流れ、鼻腔粘膜をくすぐってくる。

（うわあ、こんなビンビンなのを、七瀬さんに……。少しでも小さくしないと）

通常時に初々しいピンク色をしている亀頭はパンパンに張り詰め、いまは赤黒くなっている。さらに、鈴口から漏れ出た先走りによつて、卑猥な光沢を放っていた。

「靴下も脱いで、早くこつちを向きなさい。あたしはもう準備できてるんだからね」

「は、はい」

弱々しい声で答えつつ、翔吾はしゃがみこむようにして靴下を脱ぎ捨てると、ゆっくりと身体の向きを変えていった。羞恥で顔面は火照り、自然と腰は引け、両手を股間の前で組んでしまう。

「手をどかして、ダヴィデ像と同じポーズを取ってみてくれる？」



「あの、七瀬さんは服、着ないんですか？」

「着ないわよ。このあとまた翔吾くんがクロッキーをするんだから、二度手間でしょう？ さあ、恥ずかしがっていいいでポーズを取る」

「はい」

全裸のまま椅子に座ってスケッチブックを開き、鉛筆を握っている七瀬に急かされた翔吾は、覚悟を決めて両手を股間から離していった。

「すっごい。予想はしてたけど、やっぱり大きくしてたのね。可愛い顔に似合わず、立派なおチンチンじゃない。昔は本当に小さなウインナーみたいな感じだったのにね」

「は、恥ずかしいんですから、あまり見ないでくださいよ」

「だったら早く小さくしなさい。ダヴィデ像は勃起してないでしょう？」

「ごめんなさい」

穴があつたら入りたい、というのは、いまのような状況のことを言うのだろう、と思いつつ、翔吾はミケランジェロの有名は彫像、ダヴィデ像のポーズを取っていった。握り締めた右拳を右太腿の外側に、折りたたんだ左手は、左の肩口に寄せていく。重心を右半身に寄せつつ右足を踏み出し、左足は力を抜いた状態で外側に差し出す。

「そのまま動かないでよ」

「はい」

悪戯っぽさの消えた真剣な声音で言われた翔吾は、かすれた声で答えていった。

七瀬の様子を窺うと、真剣な表情でこちらを見つめ、スケッチブックに鉛筆を走らせている。

（七瀬さんは、コンクールに向けた作品のために僕を見てるのに、僕は……）

勉強椅子に座る全裸の女子高生。あまりジロジロ見てはいけないと分かりつつも、思春期の少年の視線は、自然とそちらに吸い寄せられてしまう。そのため、裏筋を見せそそり立つペニスは、勃起状態を維持したままであった。強張りには断続的な胴震いが襲い、鈴口からはさらなる先走りが溢れ出てしまっている。

（僕の硬くなったのを見ても、顔色をまったく変えないってことは、やっぱり彼氏の見慣れ……そつ、そうだよ！ 七瀬さんには恋人がいるじゃないか！ 僕がこんな恥ずかしい思いをする必要、なかったんだよ！）

「あの、七瀬さん。いまさらかもしれないですけど、七瀬さん、彼氏、いましたよね？」  
すでに意味をなさないと知りつつも、翔吾の口から自然と恨み節が漏れ出てしまった。

「えっ？ あれ、知らなかったの？ 別れたわよ、とつくに。バレンタインの直前だ

ったかな。だから、翔吾くんにあげたチョコレート、結構な高級品だったでしょう？」

「へっ!! あ、あれって、じゃあ、まさか……」

「そっ、彼に渡す予定だった物よ。でも別れちゃったから、キミに流用」

「そんな、あのチョコにそういう裏があつたなんて」

確かにバレンタインの時、七瀬からはベルギーの高級チョコをもらっていた。ただそれ以前から、姉友は比較的高いチョコをくれていたので、あまり気にしていなかったのだが、さすがにいまの話には驚かされる。

「よし、こんなもんでいいかな」

あつけらかんとした様子で思わぬ真実を語った七瀬は、喋りつつも手だけはしつかりと動きつづけていた。そのため翔吾が驚きのあまり、口をポカンと開けている間にラフデッサンを終わらせたらしい。

「えっ、あつ、もう、いいんですか？」

ハッと我に返った翔吾は意味がないと知りつつ、それでも自然と両手で股間を隠した。その様子を見ていた七瀬が、クスッと小さく笑った。さらなる羞恥が募り、耳まで真っ赤になってしまう。

「あ、あの、交替、ですわ。今度はまた僕が七瀬さんを……」

「そうなんだけど、その前にそれ、硬くなったままのオチンチン、楽にしてあげるわ。硬いままのオチンチンじゃ、ダヴィデ像の参考にはならないからね」

「へっ!!」

（七瀬さんは一体、なにを言ってるんだ？）

あまりに予想外の言葉に、翔吾の思考はフリーズしてしまった。怪訝な表情で美術部長を見つめると、姉友は蠱惑的な笑みを浮かべ、スケッチブックを閉じた。椅子から立ちあがり、スケッチブックを勉強机の上に置き、悩ましい微笑みを浮かべたままゆっくりと近づいてくる。そのまま、翔吾の前にすつとしゃがみこんだ。

「なっ、七瀬、さん？」

「ほら、なにしてるの、この手をどかす」

不安そうな声を出した翔吾に、七瀬が悪戯っぽい目をして見上げてくる。そして、股間前で組んでいた両手に右手をのばし、翔吾の両手をやんわりとどかしてきた。

急展開な事態に頭がついていけなかったこともあり、勃起を隠していた両手はいとも簡単にどかされてしまった。裏筋を見せそり立つ強張りを、先輩女子高生に晒していく。

「うふっ、ほんとにすっごいわね。さつきから全然小さくなってないなんて。こんな

にずっと大きくしたまんまじゃ、辛いわよね？」

見たことのない悩ましい笑みを浮かべ、七瀬の右手が肉竿の中央を握りこんできた。「んはっ、くッ、あう、なっ、なな、瀬、さんッ」

脳天に鋭い愉悅が突きあがり、総身がブルツと大きく震えてしまった。握られたペニスも大きく跳ねあがり、ピュツとさらなる先走りを滲み出させてしまう。

「うんッ、凄く硬くて、熱いわ」

「そ、そんな、ダメです、七瀬、さん、こっ、こんなことって……」

「あたしにこういうことされるの、イヤなの？ 佳織だったら嬉しいのかな？」

強張りの直径を確かめるように、肉竿に指を巻きつけた七瀬が、ペニスを優しく上下にこすりあげてきた。腰骨が震え、睾丸がキュンツと迫りあがってくる。

「そんな、イヤじゃないですけど、でも、なんで……どうしてこんな、ああ、ヤメテ、そんな強くこすられたら、僕、ぼくううう……」

「出ちやいそう？ うふっ、可愛い。楽にしているのよ。この大きなオチンチンのままじゃ、ダヴィデ像のモデルにならないでしょう？ だから、ほら、出していいよ」

「確かに、勃起したままじゃ申し訳ないとは思ってますけど、でも、まさかこんなことまで、くッ、はあ……」

自分以外の指が、初めて肉竿を握り、こすりあげてきている。その気持ちよさは、普段の自慰とは比較にならないほどであった。小さく震えながら、寧丸が根本方向へと押しあがり、張り詰めた亀頭がさらなる膨張を遂げていく。気を抜けばその瞬間にも、煮えたぎった欲望のエキスを放ってしまいそうだ。

「モデルの件はあたしがお願ひしたことだし、翔吾くんことは、昔から可愛いって思ってたから、特別サービスよ」

「そつ、そんな、可愛いだなんて……」

断続的に襲い来る射精感をやりすごしつつ、頬が一層熱くなってくる。

「うふつ、ほんとよ。ねえ、佳織とは姉弟で無理だと思ってるのなら、あたしと付き合ってみる？」

「えつ、七瀬さんと、僕が……」

思いがけない言葉に、両目を見開いてしまった。優しく扱かれているペニス、ビクンツと震えてしまう。

「そうよ。恋人同士なら、なんの問題もないでしょう？ あたしのこと、嫌い？」

「そんな、嫌いなわけではないじゃないですか。七瀬さんとっても綺麗だし、優しいし、それに、スタイルだって……ゴクッ」

七瀬の大人びた顔を見下ろしていく。すると、自然とそれ以外の部分も視界に入ってくる。お椀形の美しい膨らみに括れた腰まわり、そして黒々とした魅惑の陰毛。腰骨が震え、強張りは胴震いを起こし、先走りをさらに漏らしてしまう。

クチュツ、クチュツ、美術部長が優しく右手を上下させることに、粘ついた摩擦音が大きくなっていく。

「ありがとう。彼氏になったら、いま目で追ったところ全部、好きなだけ触れるのよ」「触れる……好きな、だけ……オッパイも、あそこ、も……」

背筋にさざなみが駆けあがり、翔吾は切なそうに全身をくねらせてしまった。

「ふふふつ、初心な反応、可愛いわ。そう、翔吾くんのものにできるのよ。それに、こんなこともしてあげるわよ。——はうッ」

次の瞬間、魅惑の微笑を浮かべた美少女の朱唇が、張り詰めた亀頭をパクンと咥えこんできた。生温かい温もりが、亀頭全体を包みこんでくる。

「ンカあつ、あつ、ああ、なつ、七瀬、さん……」

鋭い悦楽が脳天を突き抜けていった。視界が白く塗りこめられそうになり、腰が狂おしげにくねってしまう。

「ヂュツ、クチュツ、むう、ちゅばつ、ヂュチュ……」

切なそうに眉間に皺を寄せ、大人びた顔の女子高生が、強張りをさらに口腔内へと迎え入れてくれる。カリの段差を超え、肉竿の中ほどまでが一気に、肉厚な朱唇の内側に消えていった。

（くッ、口に……。七瀬さんの口に、僕のが……。これって、ふえつ、フェラ、チオ）信じられない思いが、翔吾の全身を貫いていた。美姉の親友であり、美術部の部長を務める先輩に、まさか口唇愛撫をしてもらえんとは考えたこともなかった。ズンッと睾丸がずりあがり、輸精管に白濁液が装填されていく。

「はあ、ダメ、です、七瀬さん、僕、出ちゃいますよ」

生温かな口腔内で、唾液を乗せた舌先が妖しく亀頭をくすぐってきている。快感に腰がむずがり、蕩けた眼差しを七瀬に向けていった。

「ンぱあ、ああ、いいよ、出して。ちゃんとお口で受け止めてあげるから」

「くッ、口の中に……」

ブルッと腰が震え、唾液と先走りで卑猥に光る亀頭が、さらに膨張していく。

「そうだよ。これ小さくしてくれないと、あたしも困るもん。ちゃんとゴックンしてあげるから、遠慮しないで、出して、ねッ。はうッ、ンぐッ、ううん、チュパ……」

「くほう、ああ、七瀬、さん」





「うつおおお、お姉ちゃん……」

一度腰にためを作り、次の瞬間、一気に押し進めていった。ズヂュツ、と卑猥な音を奏でながら、強張りを根本まで突き入れる。

「んはッ！ 翔吾のが、入って、くうん、来てるうツ。ああ、ツたいッ！ ううう、痛いよ、翔吾……」

息が止まりそうな感覚に、佳織は一瞬、意識が飛びそうになった。焼け火箸を秘唇に突き入れられたのでは、と思えるほどの衝撃。身体が真つ二つに引き裂かれてしまいうような恐怖。処女を散らされた感慨よりも、それらのどちらかと言えば負のイメージが、全身を貫いていたのだ。

「ぐはう、ああ、は、入ったよ、お姉ちゃん。僕のがお姉ちゃんの膣中に、奥まで全部、入ったよ。くうう、ほんと、キツキツで、すっごい」

「うん、分かる。翔吾の硬いので、お姉ちゃんのおそこ、裂けちゃいそうだよ」

ペニスに添えていた右手も佳織の顔の右横についた弟が、下腹部を完全に密着させた状態で見下ろしてきた。その表情は切なそうに歪んでおり、射精感が迫っているのかもしれない。

「ンああ、それは、僕のセリフだよ。お姉ちゃんのおそこ、締めつけが強烈すぎるから、僕のが押し潰されちゃいそうになってるんだ。ただ插れているだけなのに、お姉ちゃんの褰ヒダが、すごい勢いで絡みついて、僕、ほんとにすぐに出ちゃいそう」

「出してもいいけど、しばらくは、動かないで、ジッとしていて。私、まだこの違和感、馴染んでないから」

「うん、分かってるよ。大丈夫そうだったら、声をかけてよ。それまで僕、動かずに耐えているから。っていうか、いま、僕も動けないんだ。お姉ちゃんのおそこ、本当に締めつけが強いから。くうう、まるで、万力で思いきり締めあげられてるんじゃないかって、思えるほどだよ」

「ああ、翔吾。やつぱり、あなたでよかった。一番、信用できる男性、弟に奪ってもらえて、とっても幸せよ」

はにかんだような笑みを浮かべ、姉を氣遣ってくれる優しい弟。思えば昔からそうだった。佳織に甘えてきていても、こちらの心境を汲むかのように、静かにしていて欲しい時には、ちゃんと距離を取ってくれていた。

（そうか、翔吾とのこの距離感が気持ちよく感じていたんだ。自分の欲望よりも、姉である私のことを思ってくれる、この優しくて愛しい弟との関係が、安らぎを与えて

くれているのね)

肉洞を強引に押し広げられている違和感は、いまだに健在である。ジンジンと痺れるような痛みと異物感。それでも、処女膜を破られた直後の衝撃からは、徐々に立ち直りかけていた。これも翔吾が自身の欲望を先行させず、佳織のことを気にかけてくれているからだろう。

「ふう、ああ、はあ、だいぶ落ち着いて来たから、少しだけなら、動かしてくれていいよ。あつ、でも、ほんとに優しく、だからね」

「もちろんだよ。じゃあ、動かすね。痛かったら、言ってね」

優しく頷きかけてきた翔吾が、ゆっくりと腰を引きあげていった。ヂュチュツ、粘ついた音を伴いながら、強張りが少しずつ肉洞から抜け落ちていく。

「んうう、うんっ……」

膣壁が挟られる感覚に、佳織は下唇を噛み締めてしまった。意識が飛びそうであった破瓜の痛みとは違う、ジーンッと余韻を引く痛み。その痺れるような痛みに耐えるように、両手を弟の首にまわしていった。

「だつ、大丈夫？ お姉ちゃん」

「うん、大、丈夫。今度はまた、それを押しこんでくるんでしよう？」

「そのつもり、だけど。もしお姉ちゃんが辛いようなら、このまま全部抜いて、ヤメにしても」

「えっ？ でも、そんな中途半端なことしたら、翔吾が辛いでしょう？」

「僕のことはどうでもいいよ。お姉ちゃんに素敵な思いをしてもらいたいから、くう、僕のことなんて、無視してくれていいんだよ」

「ああ、翔吾……」

（この子だつて、このままじゃ苦しいはずなのに、それでも私のことを……）

切なそうに眉を寄せ、かすれた声で語りかけてくる弟に、佳織の胸の奥が熱くなった。精を放たない限り、翔吾の欲望が鎮まらないであろうことは、これが初体験の佳織にも理解できることであつた。

「いいよ、来て。翔吾の硬いの、またお姉ちゃんの膣中に突き入れて」

「ほんとに、いいんだね？」

「ええ。翔吾にもちゃんと気持ちよくなつて欲しいもの。だから、ねッ、一緒に気持ちよくなろう」

「おお、お姉ちゃん」

陶然とした眩きを漏らした直後、ズンッと弟が腰を突き出してきた。グチュツと淫

音を立て、再びペニスが蜜壺の奥深くに突き刺さってくる。

「ンはッ、あつ、ああン……。いいよ、そのまま、つづけて、いいからね」

「ああ、お姉ちゃんも、気持ちよくなつて。くはあ、おねえ、ちゃんッ」

痺れるような痛みに耐えつつ、佳織が小さく頷きかけてやると、切なそうな表情を浮かべた弟が、かすれた声で囁き返してきた。

グチュッ、ぶじゅつ、ニュヂュ……。翔吾が腰を上下させるごとに、卑猥な接触音が鼓膜を震わせてくる。

「ンあつ、ああ、はうん、はッ、はあ、ああン……」

「くうう、ほんとにお姉ちゃんの膣中は、気持ち、いいいい。キツキツの襷ヒダが、四方八方から絡みついてきて、ああ、僕のを扱きあげてきてるよう」

「あなたが、あんッ、翔吾が気に入ってくれたなら、お姉ちゃんも嬉しいわ。はあ、私も、少しずつだけど、気持ちよさが、大きくなつてきてるの。はっ、あんッ……」

悩ましく柳眉を歪め、潤んだ瞳で弟を見つめて言った。膣襷がこすられる痛みはあるものの、その奥からほのかな快感が沸き起こってきていた。それまで味わったことのない胎内から発生する愉悅に、佳織の声には自然と艶が増していった。

「だったら僕も嬉しいよ。ああ、お姉ちゃん、好きだ。大好きだよ」

「私も、お姉ちゃんも大好きよ、翔吾。だからもつと、気持ちよくなって」

「はあ、お姉ちゃん……」

切ない表情で最愛の弟に頷き返してやると、快感でかすれながらもウツトリとした声音の翔吾が、腰を動かしつつ、顔の横についていた右手を離れた。自由にした右手を、横になっても誇らしげに突き出ているたわわな膨らみへのばしてくる。

「あんッ、しょ、翔ごおん、はあ、ダメ、オッパイ。お姉ちゃん、オッパイ、弱いのに」  
弟の律動に連動し、ぷるん、ぷるんと円を描くように揺れ動いていた双乳。その弾力豊かな膨らみを捏ねあげられると、肉洞の奥から伝わる鋭い淫悦とは違う快感が快楽中枢を揺さぶり、腰が自然とくねってしまいそうになる。

「くはっ、ぐうう、ダメ、そんな、あつ、キツ、すぎだよ。そんな強く締めつけられたら、僕、ぼくうう……」

乳房から伝えられた愉悦に反応し、佳織の蜜壺が自然とその締めつけを強めてしまっていた。直後、目を見開いて快感と闘う弟のペニスが、ビクンツと激しく胴震いを起こし、絡みつく膣壁を押しやるようにさらなる膨張を遂げてくる。

「ハッ！ イヤ、嘘、でしょう!? 翔吾のがさらに大きく、はあん、ダメ、そんなに広げられたら、本当に裂けちゃうよう」

「ああ、気持ち、よすぎるよ。お姉ちゃん、おねえ、ちゃん……」

ヂュチャツ、グチュツ、ズチュツ……。翔吾の腰の動きが速くなってきた。張り詰めた亀頭が高速で若褻をこすりあげてくる。それまで鳴りをひそめていた痛覚が、再びぶり返してくる。

「ンう、はあ、しょ、翔吾、強いよ。そんな激しく、突かれ、たら、あんツ、痛いわ」「ごめん、お姉ちゃん。でも、僕、もう、止められないんだ。くうう、このままお姉ちゃんの内中に、僕を出させて」

「えっ！ なっ、内中って、まさか翔吾、このまま……。抜くんじゃないの!!」

（内中ってそんな……。てつきり、出す時は抜いてくれるものとはかり……。たぶん大丈夫だとは思うけど、でも、万一、大丈夫じゃなかったら……）

弟の思わぬ言葉に、肉洞から伝わる快感と痛み、双方が一瞬、遠ざかっていった。悩ましく眉根を寄せ、潤んだ瞳でまじまじと翔吾の顔を見つめてしまう。

「でも、僕、抜きたくないよ。このまま大好きなお姉ちゃんに出したいんだ。お姉ちゃんの子宮が初めて浴びる精液、僕のじゃなきゃ、イヤなんだよう」

「翔吾……」

必死に射精感をこらえているのだろう。奥歯を噛み締め、切なそうな顔をした弟に





見つめ返されると、ゾクツとした震えが背筋を駆け抜けていった。

（この子、そこまで私のことを……。いままで、姉である私を色々と思ひ遣<sup>や</sup>つてくれたんだもの。だったら、許してあげても……）

「分かったわ。いいわよ、出して。翔吾の濃いミルク、お姉ちゃんの子宮に、いっぱい飲ませてちょうだい」

「ああ、お姉ちゃん、ありがとう！」

ウットリとした視線で姉を見下ろしてきた弟が、再び腰の動きを加速させてきた。ズチャツ、にゅぢゅつ、ヂュチュ……。膣襞を挟る蜜音がまたしても高鳴り、佳織の脳が鋭い愉悦に揺さぶられてしまう。

「あんツ、くツ、翔吾、ああン、凄い、激し、すぎるよう」

（イヤツ、なに、これ、こんな感覚、初めて。腰が浮いちゃいそうに……。はあん、それに頭の先に、痺れるような気持ちよさが、突き抜けていく）

「ンはあ、ダメだ、お姉ちゃん、そんな下から腰、繰り出して来ないで。ほんとに、出ちやいそうだ、ああ、お姉ちゃん」

「はンツ、うんつ、ああ、翔吾、私も変なの。腰を動かすつもりなんて、まったくないのに、でも、腰が勝手に、あんツ、また大きく、翔吾のオチンチンが、また私の膣

中で大きくなった。ダメだよ、ほんとに、そんな、うんっ、硬くて大きいので、くっ、ズンズンされたら、お姉ちゃん、ほんとに、壊れ、ちゃう」

脳天に突き抜ける愉悅に、佳織の中のおんなが一気に覚醒してしまっていた。弟の突きこみに合わせるように腰を揺り動かし、締まりの強い肉洞をさらにキュンキュンッと蠕動させ、翔吾の強張りを弄んでいく。

「うほっ、ああ、もう、くっ、出ちゃう、お姉ちゃん、僕、ぼくううう」

「あんっ、ダメ、そんなにオッパイ強く、ギュッてしないで、もっと優しく、揉んでくれなきゃイヤ」

左乳房が翔吾の右手によって、思いきり驚掴みされてしまっていた。愉悅ではない感覚に、思わず顔を歪めてしまう。それでも、腰だけは本能に突き動かされるように揺らめき、弟のペニスを握め捕っていく。

「ごめん、でも、僕、本当にもう、限界、なんだ。ンはあ、まさか、清楚なお姉ちゃんが、くっ、こんなエッチな腰の動きをする、なんて、うふおおお……」

「エッチな動きなんて、してないよ。翔吾がたくさん、ズンズンしてるだけだもん」  
「ぐっ、ダメだ、ほんとに、もう、出るっ！僕、もう、出ちゃうううううッ！」

ズンッと一際激しく、翔吾が腰を叩きこんできた。直後、膨張していた亀頭がさら

に膨らみ、次の瞬間、濃厚な白濁液が勢いよく子宮に迸り出てきた。

ずびゅつ、ドピュッ、ずびゅびゅびゅつ、ドクン……。

「ンはっ！ イヤ、来てる。翔吾の、弟の精液が子宮にいつぱい、あんッ、ダメ、私、わたしも、なにかが、くッ、来る。来ちゃってる。あつ、はぁッンッ！」

胎内に浴びせかけられた白濁液の感触に、蜜壺全体がキュウッと収縮していく。同時に頭の中が真っ白となり、腰だけが独自の意志を有しているかのように、ビクン、ビクンッと断続的に跳ねあがっていた。

「ンカあッ、す、すっごい！ 搾られてる。お姉ちゃんのおそこに、僕の精子が、吸い出されていくぅう」

「ああン、イヤ、まだ、まだ出るの。ダメよ、そんなにいっぱい注ぎこまれたら、お姉ちゃんの子宮、破裂しちゃうよう」

断続的な脈動とともに噴き出す欲望のエキスに、佳織は驚きの声を放っていた。絶頂感に霞む瞳で、弟の顔を見つめていく。

「ごめんね、お姉ちゃん。でも、大好きなお姉ちゃんに出せてるって思うだけで、くぅう、射精が止まらないんだ。初めてなのに、無理させちゃって、ほんとに、ごめん」  
「はあ、平気よ、お姉ちゃんは大丈夫。とっても素敵な初体験だったわ、ありがとう」

（よかった。翔吾に初めてを奪ってもらえて、本当によかったわ。これは、翔吾の初めてを奪った七瀬に、少しは感謝しなくちゃいけないかもしれないわね）

翔吾の真摯な瞳に、佳織の総身がブルツと震えた。気づいた時には、弟の首にまわしていた両手を、グツと引き寄せるようにしていた。

「ああ、お姉ちゃん」

「ねえ、キスして。お姉ちゃんのおそこに、濃いのをいっぱい出しながら、うんと優しいキスをしてちょうだい」

顔の横についていた左手を折り曲げ、豊乳を押し潰すようにしていた右手も、膨らみから離れた翔吾に、佳織は甘い吐息混じりの声で訴えかけていった。

「うん、いっぱいしよう。キスもエッチも、僕、お姉ちゃんといっぱい……。チュッ」

弟の恍惚感に染まった顔が近づいてくる。次の瞬間、佳織のふくらとした可憐な朱唇が、翔吾の唇によつて塞がれた。

（ああ、好きよ、翔吾。お姉ちゃんは、あなたが大好き）

だいぶ勢いは弱くなったが、それでもビュ、ビュツと断続的な白濁液の奔流を感じながら、佳織は陶然とした思いで、弟に身を任せていくのであった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

キルタイムの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!